

# 養父市若者ミライ会議 提言

—養父市の人口流出・少子化を食い止めるために—

2024年12月

## I. 養父市若者ミライ会議について

### 1. 設立趣旨

養父市が直面する人口減少や少子高齢化といった課題に対応し、若者に選ばれるまちづくりを実現するため、「養父市若者ミライ会議」を設立した。本会議は、ターゲット層である若者世代の新たな発想や意見を積極的に取り入れ、地域の未来を見据えた提言をすることを目的とする。

### 2. 参加者

本会議には、京阪神に在住する養父市出身者の女性 5 名が参加した。養父市役所の経営政策・国家戦略特区課から 2 名がオブザーバーとして、兵庫県立芸術文化観光専門職大学教員の小畑克典がファシリテーターとして、それぞれ参加した。

■■■ ■  
■■■ ■■■  
■■■ ■■■  
■■■ ■■■  
■■■ ■■■■

### 3. 活動の詳細

会場： JAM BASE 会議室（グラングリーン大阪内）

第1回 2024年10月24日（木）18時45分-20時45分

- 養父市で暮らす・働く（または、人に養父市で暮らす・働くことを薦める）とすれば、何/どんなところを理由としてあげるか？
- 養父市がもっとこうだったら自分は養父市で暮らす・働く（あるいは人に養父市で暮らす・働くことをもっとすすめられる）のに、と思うところはどんなところか？
- 養父市の現状と取り組みについて市役所から説明
- 市役所からの説明に対してどう考えるか？
- 養父市からの人口流出が続いている、あるいは、婚姻率の低下による少子化が進んでいることについて、何が大きな課題なのか？

第2回 2024年10月31日（木）18時45分-20時45分

- 自分にとって、「理想的な暮らし」「住みたいと思える地域」はどんなところか？
- 理想像と養父市の現状との間に、どんなギャップがあるか？なぜギャップがあるのか？
- そのギャップを埋めるためには、誰が、何をすれば良いと考えるか？
- なぜこれまでそうした取り組みがなされてこなかったのか？

第3回 2024年11月14日（木）18時45分-20時45分

- 養父市の人口流出・少子化を食い止めるための具体案を出し合い、優先順位をつける

第4回 2024年11月28日（木）18時45分-20時45分

- 養父市の人口流出・少子化を食い止めるための具体案についてさらに検討を加える
- 提言案のまとめ

## II. 現状認識

### 1. 養父市で働く・暮らすことのメリット

養父市で働く・暮らすことのメリットとしては、主として「コミュニティ」「人間関係」「自然」に関するものが数多く挙げられた。養父市には、京阪神地区に住んでいるとは体験できない、「田舎ならではの良さ」が残されており、そうした「田舎らしさ」は養父市で暮らすことの「メリット」として認識されている。

<挙げられた主なメリット>

- 時間がゆったり流れている
- 地元ならではのアットホームさ/人があたたかい/共通の愛しいものがある
- 両親・祖父母と暮らせる/顔見知りの方々と過ごす心地よさ
- 部活の仲間・先輩・後輩と会える
- 自分で工夫して遊びが発掘できる
- 人工物に囲まれていない/川遊びができる/雪が降る

### 2. 養父市に足りないポイント

一方で、養父市の生活について足りない点として、「情報発信」「利便性」「人材」が不十分であることが挙げられる。

<挙げられた主なポイント>

- 情報発信の不足
- 利便性の不足（店舗、コンビニエンスストアなど）
- 限られた移動・交通手段（電車・バスの便数、自動車保有が前提の生活）
- 人材不足による「おばあちゃん・おじいちゃん世代」の時間捻出の困難さ（介護に体力がかかり、高齢者ですらも休む余地がない、孫が里帰りしても孫に会える時間がない、等）

### 3. 養父市による現時点での取組とそれへの認識

養父市役所から、養父市の人口動態や、市民アンケートから読み取れる養父市の現状、市としての取り組みについて説明が行われた（別添参照）。これに対する感想・意見は、概ね以下のとおりである。

<挙げられた主なポイント>

- 「居空間構想」は評価できる
- 市が実践している施策について、情報が伝わっていない
- 子供の医療費無料が継続していることは評価できる
- U・Iターンを可能とする制度設計は評価できる
- 養父市への移住の理由に興味がある
- 街ぐるみで幸せを共有できたら良い
- 誰もが集える場づくりを希望する
- 高齢者と若年層の両方の見方を取り入れるのは難しい
- 交通網の整備は重要（駐車場、特急料金特例、やぶくる効率化等）
- 気持ちだけでは生活は成り立たない。具体的な施策が必要

### III. 人口流出、少子化の背景にある課題

養父市の人口流出、少子化の背景にある問題は、必ずしも養父市固有の問題ではない。一方で、養父市として一定の準備・支援を行えば解決できる課題もあることもまた、明らかになった。

#### <結婚観についてのポイント>

- 現在、結婚について世間の圧力や強制力は以前ほどなく、結婚しなくても十分暮らしていけると感じられる
- かつての夫婦の形がなくなり、男女ともに結婚には必ずしもメリットがあるとは限らない。結婚・夫婦について「こうなりたい」と思うロールモデルもない
- 給料と物価高が見合わず、自分のことで精一杯

#### <女性の負担についてのポイント>

- 晩婚化が進む中、高齢出産は辛い
- 婦人科検診が充実していない
- 出産によりキャリアパスが止まる懸念
- 女性には介護がつきものとなり、仕事・介護・育児の負担が一度に寄ってくる懸念

#### <養父市に住むことについてのポイント>

- 出会いの場がない
- 高い区費・非益の負担等、行政サービスでカバーできないことが多い

## IV. 理想の姿と現状とのギャップ

ミライ会議では、理想的な暮らしができる地域の条件を、「行政サービス」「コミュニティ」「環境」「仕事」「利便性」の5つの面から挙げ、現状とのギャップを検討した。

「環境」については、養父市は申し分のない条件を備えている。「行政サービス」については、治安・行政サービスともに良好であるにもかかわらず、住民への周知が足りないのではないかとの意見が挙げられた。「コミュニティ」については、従来の地域コミュニティに加え、移住者やUターン者を受容れるべく行政が「場」を用意することも重要ではないかとの指摘があった。「仕事」については、仕事の有無ばかりでなく、「やりたい仕事に就ける」環境の提供が重要との指摘があった。「利便性」については、地理的条件そのものは如何ともし難いものの、交通手段や店舗網の確保など、利便性向上に向けた施策も考えるのではないかとの議論であった。

### 1. 「理想的な暮らしができる地域」「住みたいと思える地域」とは

#### (1) 行政サービス

- 治安が良く、安心できる環境（動物の出没も含む）
- 行政サービスが充実している地域（育児・介護等）

#### (2) コミュニティ

- 同世代の人が近くに数多く住んでいる環境
- 活気があって明るい環境

#### (3) 環境

- 自然豊かな環境（例えば、川がきれいな環境）

#### (4) 仕事

- 単に「仕事がある」だけにとどまらず、自分がやりたい仕事ができる環境

#### (5) 利便性

- 必ずしも都会ではないが、少し移動すれば都会に行ける環境
- 自家用車がなくても自由に移動できる地域
- 徒歩圏内の店舗の所在（スーパー、薬局、電器店）
- 充実した行政サービス

## 2. 理想と養父市の現実との間のギャップ

### (1) 行政サービス

- 治安も良く行政サービスも充実しているが、住民等への周知が足りない

### (2) コミュニティ

- 人口減少そのものには歯止めはかからない
- 昔ながらの近所付合に加え、行政が（移住者・里帰り者への）「場」を提供する必要があるのではないか

### (3) 環境

- 良好。特段のギャップなし

### (4) 仕事

- 職自体はある（あると言えばある）。ただし、必ずしも「自分がやりたい仕事ができる環境」ではない

### (5) 利便性

- 商店・飲食店も「あると言えばある」。ただし、大都市にあるような多様性はない
- 地方（田舎）であることによる不便さはどうしても存在

→ なぜ、明石市や三田市のようなアピールができていないのだろう？

### 3. 理想と現実のギャップを埋めるために必要と思われる手立て

#### (1) 行政サービスの情報提供

- 市としての SNS の活用、イベント情報の通知方法等に改善の余地がある
- 地理的条件からの不便さも、情報の出し方によっては、都市生活者から見ればメリットと映ることも考慮すべき
- U・I ターン等、移住を考える層のためのロールモデル紹介を積極的に進めるべき
- 政策デザインができる市職員を増やす必要がある

#### (2) 交通

- 公共交通（バス）のあり方は要検討
- カーシェアリングのあり方も要検討

#### (3) 企業誘致

- 単に企業誘致を行うだけにとどまらず、例えば、養父市に居住しながらリモートワークができる企業（雇用）の誘致や、養父市に居住しながら「自分がやりたい仕事」ができる環境を整えることが必要である

#### (4) 移住インセンティブの拡充

- 移住者に対する行政サービスの拡充はもちろんだが、永く住んでもらえるように、長期居住に対してインセンティブを用意する必要があるのではないかと（5年、10年などの節目に応じて）

#### (5) 利便性

- いたずらに店舗を招致するのではなく、住民の購買パターンを収集した上で、それに応えることの出来るサービスのあり方を考えることが重要ではないか

#### (6) 気持ちの持ち方

- 「田舎だから」「地理的条件は変えられないから」というのではなく、あきらめない気持ちが養父市として大事ではないか
- その中で、「手当たり次第にやる」のではなく、選択と集中の考え方を導入することが重要ではないか

## V. 提言：養父市の人口流出・少子化を食い止めるための具体策

### 1. 情報発信

- 県内外での PR イベントへの出展・出資（広告・物品提供による知名度向上）
- ふるさと納税のアピール（定期便の活用、SNS での発信等）
- 大学と提携し、養父市に拠点を設ける
- ビバホールを使ったオーケストラ合宿の誘致
- チェロコンクールのプロモート
- フォークアート（木彫）のプロモート
- 阪神間での別荘プロモーション
- 京阪神の電車・近畿圏の特急電車内での車内広告の有効活用
- メディア（テレビニュース等）での情報発信
- SNS、TikTok、Instagram、YouTube の活用

養父市がすでに提供している諸々の行政サービスの中には、他の自治体と比較しても必ずしも引けを取らないものも数多く含まれている。下記に挙げる新しい施策も含め、市としての取り組みの養父市民や他地域の住民への幅広い周知は、打ち出した施策の有効性を確保する上でも、極めて重要である。

SNS 等のインターネットメディアの活用やテレビニュース等での情報発信、京阪神での電車等での車内広告の活用はもちろんだが、養父市ならではの特徴をアピールする手段として、ふるさと納税の活用は有効である。ふるさと納税の対象に「若年層にも手の届きやすい価格設定」や「一部日用品」も加えることで、新たにふるさと納税を始める層への敷居を低くする効果が期待できる。

また、養父市の既存施設・リソースの更なる活用も有効である。例えば、ビバホールはその音響効果も高い評価を得ており、隔年開催のチェロコンクールは内外で注目されている。チェロコンクールの魅力を内外に伝えるだけでなく、例えば、アマチュアオーケストラの合宿の場として一定期間ビバホールを提供するなど、プロ・アマを問わず音楽家が養父市に滞在し、養父市の魅力を理解する場を設けることで、将来にわたる養父市のファン・つながり人口の増加につながるものと考えられる。

同様に、木彫フォークアートおおよも 30 回を超えて開催されている。大屋の木彫アートへの取り組みを、広くプロ・アマの木彫ファンを集め、育てる取り組みへと広げていくことも、養父市を全国にアピールする上で有効と考える。

若年層が養父市の魅力に目を向けるための取り組みとして、大学生を招いた催し

も有効である。養父市に拠点を持たない大学と提携し、特定のテーマに絞った実習拠点等を設けることは、将来に向けたつながり人口の増加に資するものとする。

## 2. 長期移住へのインセンティブ付け

- 「家」（居住用住宅）プレゼント
- 賃貸住宅の家賃補助
- 長期在住ボーナス（5年、10年など）
- 家賃補助のある仕事を増やす
- Uターン者への奨学金免除
- 家屋の耐震工事補助、リノベーション展示会等の開催

若年層・子育て世代の養父市への移住を促し定住に繋げることは、人口減少を最小限にとどめ、町の活気を維持するために非常に重要である。

移住が定住につながるプロセスが、常に順風満帆でないとするならば、養父市として一定の「長期在住ボーナス」を用意し、少しでも定住へのインセンティブを高める仕組みを整えることが、有効な手段となりうる。

長期在住インセンティブとして最も有効と考えられるのは、住宅関連のサポートであろう。一定期間養父市に居住した世帯に対する居住用住宅の提供は、空き家の有効活用手段としても有効である。また、持ち家取得に至らないまでも、賃貸住宅についての家賃補助を手厚く行うことで、養父市への長期居住インセンティブを高めることに資するものとする。空き家の有効活用については、家屋の耐震工事に対する補助や、リノベーション展示会（業者によるものとDIYでのリノベーションの双方を含む）の開催も有益だと考える。

もちろん、これら全てを行政で直接行う必要はない。例えば、企業誘致の際、家賃補助を手厚く実施する企業に対する補助金制度の用意や従業員居住用物件の提供は、安定的な労働力の確保を目的とするし企業にとっても受け入れやすい施策となるのではないかと考える。

### 3. 子育て支援

- こども誰でも通園制度
- 子育てひろばの充実（実施回数、情報発信）
- 親子で遊べる無料の遊び場
- チャイルドシートの無償化
- おばあちゃんサービス
- 養父市独自の保育士優遇策（家賃負担への補助、配置人数の余裕、ICT化等）
- 子育てLINE等相談窓口の設置
- 教育リソースの充実
- 婦人科検診の拡充

子育て支援は、若年層・子育て世代を養父市に呼び寄せる上での最重要課題の一つである。これまでの養父市の取り組みも、子ども医療費の無償化をはじめとして他の自治体に決して引けをとるものではないが、自治体間の競争が激化する中、よりエッジの効いた施策を打ち出すことが、養父市の魅力をアピールする手段となると考える。

例えば、保育園については、「勤労世帯」の児童を保育する枠組みを超えて、「誰でも通園制度」を積極的に推進することが考えられる。これは、高齢者リソースの有効活用（おばあちゃんサービス等）と合わせて養父市ならではの施策として実行可能であろう。

一方、保育士の人材確保については、他の自治体との競争となることを考慮すれば、いち早く行政として施策を打ち出し情報を発信する必要がある。他地域から保育士を呼び寄せるための優遇策を、他の自治体に先駆けて打ち出すことが重要である。例えば、養父市ならではの報酬体系、余裕を持たせた人員配置、ICT化の促進、各種住居手当の拡充等が、即効性のある施策として考えられる。

諸々の取り組みを通じて養父市に子育て世代が増加した際には、それら家庭が横のつながりを持って暮らしていける環境が整っていることも必要となる。専門スタッフを備えた「子育てひろば」の拡充も必要となる。また、LINE等を通じて、必ずしも対面での相談に限らない相談窓口を拡充することも、子育て世代の支援には有用であると考えられる。もちろん、こうした取り組みが、適切に広く周知される手立てが必要であることは言うまでもない。

#### 4. 里帰り促進

- 「二世帯」「三世帯」住宅に加え、「近居」への補助金
- 育休・産休に加えて、祖父休暇・祖母休暇を創設

養父市出身者が京阪神をはじめとする他の地域で結婚して家庭を持ち、それから養父市への里帰りを希望するケースは必ずしも少なくないと思われるが、その際に先ず考えなければならないのが、住居と子育てであろう。

従前より二世帯住宅への補助金等の施策は取られてきてはいるものの、他地域からの里帰り世帯が必ずしも「二世帯同居」を希望するとは限らず、そこには一定の温度差も想定される。例えば「ちょうどスープが冷める距離」での二世帯・三世帯同居を容易にするサポートも必要ではないかと考える。すなわち、「近居」への補助金を創設することで、個々の世帯のニーズをきめ細かくフォローすることが可能となると考える。

また、近時の人材不足を反映し、祖父・祖母世代の共働きも決して少なくない。孫の里帰りに際しても、平日の仕事について休暇が取得できない場合には、結局孫の顔を見ることができないまま、子・孫が他の地域に戻ってしまうケースも十分ありうる。育休・産休の取得が広く進む中、養父市としてそこから一歩進んだサポートを行うとすれば、例えば、「育孫休暇」「祖父休暇・祖母休暇」の創設であろう。祖父・祖母世代が孫と触れ合う時間を創出すると同時に、親世代の育児負担の軽減を図ることで、「養父では近居を前提とした子育て支援が充実している」ことをアピールする機会となろう。

## 5. 交通手段の充実

- 自動運転技術開発への投資
- 学生の定期代無料 or 割引の充実
- 公共交通機関の料金引き下げ
- 阪神行き高速バスの便数増・バス停数増
- 特急料金の養父市民割引
- 自転車で移動しやすい環境づくり
- 無人駅の解消
- 八鹿駅の駐車場設置
- レンタカー（タイムズ）を増やす
- やぶくる（養父市マイカー運送ネットワーク）の効率化と、クーポンの発行

交通インフラは、養父市内の市民の交流促進のためにも、他地域からの移住促進のためにも、他地域在住のつながり人口を確保するためにも、欠かせない公共インフラストラクチャーとなる。

まず、市内の交通については、市内をカバーする公共交通機関の充実を図る必要がある。養父市では自動運転バスの実証実験への取り組みを始めたところだが、これの早期実装とサービス拡大は、地域住民の移動手段の確保と、住みやすい街づくりに直接に資するものとする。また、既存の公共交通機関（電車・バス）の利用率を上げるための施策も必要である。学生に対する割引の充実、料金引き下げ等の施策については、行政が率先して取り組むべきである。一方で、公共交通機関や自家用車に頼らない、自転車で移動を容易にする環境づくりも重要と考える。

また、他地域との間の交通の充実も非常に重要である。大都市圏にない養父市の良さを活かしながら、同時に大都市圏への容易なアクセスを確保することも重要である。京阪神に向かう高速バスについてその利便性向上（増便、大屋・関宮等からの乗車を可能にすること等）は、「大都市圏に住みたくはないが、一定程度の利便性が享受できる距離に居たい」と考える層の定住促進に資するものとする。

## 6. シルバー人材を活用した生活サポート

- 高齢者の元気を活かし、地域に活気を創出
- 里帰り出産の支援サービス
- おばあちゃんサービス
- 高齢者による読み聞かせボランティア
- 家事グランプリ・家事マイスターの選定など
- シルバー人材による家事支援制度
- 高齢者が一緒に楽しめる習い事講座（介護ホーム等での編み物教室等）

養父市に限らず、少子高齢化は日本全国共通の現象である。これを単に「高齢化」と捉えるのではなく、積極的な意味を見出すことが重要である。すなわち、養父市には経験を積んだ人材が豊富にあると捉え、そこから地域の活性化に繋げることも可能である。

高齢者の経験が活きる分野としては、家事サポート、子育てサポートが先ず挙げられる。勤労・子育て世代の負担が女性に寄せられるのではなく、「やりたい仕事を誰もができる」状況を創出する上で、高齢者リソースの活用は極めて有効である。養父市独自の認定家事サポート資格（例えば、家事マイスターの選定など）を設けることによって、高齢者が自らの経験にさらに磨きをかけるインセンティブを産むことも可能だろう。また、高齢者同士が一緒に楽しめる習い事について、地域の高齢者自身が講師となるような試み（編み物教室等）も有効ではないかと考える。

加えて、養父市の地域としての記憶を次世代につなげ、郷土愛を育む上で、高齢者が次世代・次次世代にその記憶・経験を引き継いでいくことも重要、かつ、外部リソースに任せられない分野である。高齢者による読み聞かせボランティアなど、世代を繋ぐコミュニケーションの場を、行政手動で創出することも重要である。

## 7. コミュニティづくり

- 夏祭りの拡大（浴衣レンタル、花火の拡充）
- 季節に合わせたイベントの継続開催
- 飲食可能なフリースペースの拡充
- 養父市内名所ツアーの定期開催
- 阪神間を出発するバスツアーの開催
- スポーツ好きのためのイベントとその発信
- 用具無料レンタルのあるスキー・スノボイベント等

養父市のコミュニティとしての魅力は、すでに在住者・出身者によって指摘されているところである。

今後の施策としては、従来からの魅力について、「アピールできる点をより伸ばしていくこと」および「養父市の魅力をより多くの人の目に触れるようにしていくこと」が重要だと考える。

夏祭り（やぶふるさと祭）は養父市民では知らない者のないイベントだが、これについては規模の拡大と周知の徹底によって、近隣地域の住民も楽しめる催しとしてプロモートすることが可能である。また、夏祭りに限らず、四季を通じてイベントを継続開催することで、養父市を訪れる機会を増やすことも有益であると考えられる。例えば、スポーツ愛好家のためのイベントを開催し、用具を無料で貸し出すことも試みてはどうか。

このようなイベントへの京阪神からの集客を担保するためには、阪神間を出発するバスツアーの開催は有効ではないかと考える。養父市内の名所を巡るツアーとセットにすることで、養父市の良さがより多くの人々の目に触れる機会を提供することにもつながると考える。

イベント開催期間以外にも、人が集える「場」があることは重要である。飲食可能なフリースペースとしては、YB ファブがその機能を果たしているが、これに加えて、幅広い市民が安心して使用できるフリースペースがあることは、コミュニティの「心地よさ」を担保するものとして重視すべきである。

## 8. 戦略性をもった企業誘致

- 養父市に拠点を置くことにメリットがある企業にターゲットを絞った誘致戦略
- スポーツチームの誘致

養父市への企業誘致は、雇用の創出等に向けて重要な施策の一つだが、それにあたっては、「養父市だからこそ」の意義を見出す必要がある。進出した企業が「拠点が養父市にあること」のメリットを最大限に享受できる一方で、養父市民が「その企業が養父市にあること」の意義を十分に感じる必要がある。

例えば、スポーツチームの誘致は、戦略的・長期的な視点で行えば極めて有効な手段となりうる。チームの地域へのコミットメントと、地域としてのチームに対するホスピタリティとが合わさった時に、周辺のサービス産業、商業活動、コミュニティづくりにもつながる効果が期待できる。

## 9. 利便性の向上

- LINE 等を通じた生活サービスの提供（粗大ゴミの出し方等）
- コンビニ以外の店舗の市内各所への設置

養父市に居を構えるにあたって、利便性が担保されていることはもちろん重要である。しかし、それは必ずしも、「養父市に大都市圏と同じ街並み・テナントビルが建ち並ぶ状況」を想定していないことは考慮する必要がある。

養父市ならではの良さを維持しながら、かつ、都市圏で最低限担保されている利便性がなんなのかを検証した上で、そのレベルの利便性を保証する店舗（あるいは購買の仕組み）が市内各所に設けられることが重要である。

また、生活サービスの利便性を向上させるには、LINE 等を通じた生活サービスの提供も有効であろう。例えば粗大ゴミの出し方一つについても、LINE 等を通じて手続きが完了する仕組みを作るとは、日常レベルでの利便性を向上させる手段となるはずである。

【別添資料】

1. 第1回ミライ会議資料
2. 第1回ミライ会議の作業経過（写真）
3. 第2回ミライ会議資料
4. 第2回ミライ会議の作業経過（写真）
5. 第3回ミライ会議資料
6. 第3回ミライ会議の作業経過（写真）
7. 第4回ミライ会議資料
8. 第4回ミライ会議の作業経過（写真）
8. 第4回会議を踏まえた具体案
9. 養父市役所作成資料「養父市若者ミライ会議」

以 上